

2023年度（第48回）學術研究振興資金 學術研究報告

学 校 名	成 城 大 学	研究所名等	成城大学民俗学研究所	
研 究 課 題	「山村・海村・離島調査」の創造的継承と発展に向けた基礎的研究 —新たなるOポイントの構築に向けて—		研 究 分 野	文 学
キ ー ワ ー ド	①山村調査 ②海村調査 ③離島調査 ④追跡調査 ⑤柳田國男 ⑥採集手帖 ⑦現代民俗学 ⑧『山村生活50年』			

○研究代表者

氏 名	所 属	職 名	役 割 分 担
小 澤 正 人	文 芸 学 部 成城大学民俗学研究所	教 主 授 事	総括

○研究分担者

[illegible]

「山村・海村・離島調査」の創造的継承と発展に向けた 基礎的研究

ー新たな「0ポイント」の構築に向けてー

1. 研究の目的

(1) 研究の背景

①これまでの取り組み

民俗学の創始者・柳田國男は1930年代後半に「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査」（通称「山村調査」）を実施し、日本の民俗学史上はじめての同一規格による組織的全国調査を実現させた。続く「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の調査資料蒐集」（通称「海村調査」）、1950年代の「本邦離島村落の調査研究」（通称「離島調査」）をあわせて、これらの初期民俗学の系統立った調査の成果は、日本における庶民生活の変遷に関する資料として高く評価されている。

成城大学民俗学研究所では以上の調査票である「採集手帖」を収蔵し、DVDとしてデジタル公開しているのみならず、「山村調査」「海村調査」「離島調査」を「0ポイント」としてその追跡調査を実施してきた。すなわち、1980年代には「山村生活50年 その文化変化の研究」、1990年代には「沿海諸地域の文化変化の研究—柳田國男主導『海村調査』『離島調査』の追跡調査研究—」等を実施し、その後も追跡調査をベースとするプロジェクトが継続されてきた。ただし、これらの追跡調査は限定的なものであり、また、未刊行の一次資料が研究所内に多く集積されている。2022年度からは「民俗学研究所による山村・海村・離島調査資料の再整理」を始動させ、資料の再整理を行ないつつ、今後の追跡調査の方向性について検討を進めている。

②問題の所在

以上の蓄積からは、日本の戦後生活のドラスティックな変容が明らかにされてきた。近年の調査から確認されるのは、生活変化の速度の加速である。そのような高速度化する変容に加え、毎年のように襲来する災害やこのたびのコロナ禍は、各種の暴力的断絶を地域生活にもたらしている。来たるべき「山村調査」100周年にむけては、より短いタイムスパンでの定点記録の集積が求められる。他方、インターネット元年から30年近くが経過し、デジタルデバイスは僻陬諸地域の高齢者の手にもわたっている。情報化社会の生活インフラの激変は、「追跡」調査のみならず、新たな焦点を定めたうえでの総合的調査を要請する。すなわち、「追跡」に終始することでは見えない「現在の生活」が厳然としてあるのであり、現代の社会文化動態に見合った視点の確立が急務となっている。2023年を以て開設50周年を迎えた民俗学研究所としては、調査研究のネクストステージに向けて、長期的な調査継続を前提とする新たな「0ポイント」の構築が求められていると言えよう。

(2) なにをどこまで明らかにするか

①長期的定点調査の基礎を構築

本研究では民俗調査および人類学的調査・歴史学的調査の経験をもち、かつ、民俗学の今日の社会状況への対応を重視する現代民俗学の視野をもつ研究所員が連携し、成城大学民俗学研究所の「山村・海村・離島調査」の追跡調査の成果を継承しつつ、今日の地域課題に即応した調査を実施することで、持続可能な長期的定点調査の基礎を構築することを目指す。

②民俗の衰退論をこえる

具体的には「山村・海村・離島調査」の対象地から調査地をピックアップし、当該地域の生活事象の調査研究を3ヶ年にわたって行なうことで「山村調査」以後の生活変容を総括し、あわせて、いわゆる「民俗」に拘泥することなく調査地の暮らしの「いま」を観察することで、次の100年に向けた継続的な定点調査の焦点とすべき論点を明らかにする。これにより、消滅や断絶、崩壊や変容を数え上げる定点調査を乗り越え、地域のクリエイティビティをも考慮した調査を行なうことで新たな「0ポイント」を構築し、民俗学研究所の将来の基幹事業のプロトタイプを構築する。

2. 研究の計画

(1) 2023 年度の計画

①山村調査班の活動

岩手県九戸村・宮城県丸森町・茨城県高萩市・千葉県香取市での調査。

②海村・離島調査班の活動

東京都青ヶ島村・鹿児島県奄美市での調査。

(2) 調査成果の整理と共有

①調査成果の整理

上記調査の成果を速やかに整理し、かつ山村・海村・離島調査およびそれらの追跡調査の成果と照合可能にするための統合作業をアルバイトスタッフに依頼。

②調査成果の共有

上で述べた①の成果はクラウド上に保存し、ネット環境があれば調査地で随時閲覧可能な状態として共有する。これにより、各班の連携的な調査が期待される。

3. 研究の成果

(1) 追跡調査の進展

①山村調査班

岩手県九戸村・宮城県丸森町・茨城県高萩市・千葉県香取市での調査により、既往の調査以降の生活変化の様相を把握する作業を進めた。

②海村・離島調査班

東京都青ヶ島村・八丈町での調査により、既往の調査以降の生活変化の様相を把握する作業を進めた。

(2) 新たな調査地へ

①山村調査班

千葉県香取市での調査に際し、地域社会の変容をモビリティやツーリズムとの関係から把握するため、従来の調査地ではなかった佐原旧市街地での観察と聞き取りを実施した。

②海村・離島調査班

鹿児島県奄美市での調査によって、現代における離島生活の諸課題に照準した新規調査の可能性を模索した。

4. 研究の反省・考察

(1) 2023 年度の反省

①調査者拡充の必要

2023年度は十分な深度の調査を実現させることができたが、複数名のスタッフで実施した香取市佐原調査以外は、調査効率に課題があるといえる。2024年度は研究協力者を増員し、ひとつの調査地に複数名の調査者で臨み、かつ、より広域の調査を平行して実施できる体制を構築することを目指す。

②インテンシブな調査の必要

2023年度調査からだけでも、現代民俗学的視点から追跡調査を行なうことの意義を十分に確認することができたが、それは同時に、個々の地域により深く入り込むべきことを意味する。2024年度以降、調査地は拡大していく計画であるが、2023年度の対象地域にも引き続き通い、調査を継続する必要がある。

(2) 2023 年度調査成果からの考察

①画一化論への疑義

地域生活の近代化・現代化は各地の画一化を惹き起こすという見方が随所でみられる。近代化・現代化の過程に注目する本プロジェクトも、そのようなどこでも同じになってしまった日本を描き出すことになるかもしれないという懸念があったが、交通網の整備、情報化、ツーリズムへの対応、国際化、日常への商業主義の浸透（生活の外部化）といった諸点においても、各地の状況は当該地の歴史的背景や環境、近代化・現代化の経路、そして、私たちと同様に現代人であるところの地域住民による創意工夫とヴァナキュラーな生活の戦術によって、きわめて多様であることが確認できた。民俗の消滅、地域社会の衰退といったビジョンとともに想定されやすい〈画一的現代〉観を批判し、各種の課題を抱えつつもよりよく暮らそうとする人びとの営みを正視することが、本プロジェクトを通して可能に

なるだろう。

②地域を超える試みへ

大規模な地域調査プロジェクトである山村・海村・離島調査の追跡を試みる本プロジェクトも必然的に「地域」を対象とする調査を前提にしている。その一方、生活の動態は「家」や「地域」といった諸集団のみならず、交通網の沿線や災害の被災地などの広域にわたるエリアに関わる現実には作用し、また、一方で、地域社会で特定の人びとが果たしてきた役割・機能の変遷としても把握することができる。すでに、本プロジェクトの前身となるプロジェクトが半島を単位とする広域民俗誌に挑戦したように、メゾレベルの視点とミクロな視点とを往還しつつ、地域社会を横断するような調査が試行される余地があるといえるし、地域ではなく、個人の営みや個人に担われてきた役割の世代交代の過程を追跡していくような調査が構想される余地があるといえる。これにより、イエやムラによる生き方への拘束性が減退し、選択的で流動的な暮らしが可能になった現代社会における生活実態をより適切な深度で捉えることができるだろう。

以上の①②については、以後のプロジェクトにも柔軟に関連づけ、〈新たなる0ポイント〉と称すに見合う基礎的情報群の構築を目指していく。

5. 研究発表

(1) 学会誌等

調査継続中につき、なし

(2) 口頭発表

調査継続中につき、なし

(3) 出版物

調査継続中につき、なし